

流域情報

あらかわ



発行●NPO法人荒川流域ネットワーク編集委員会／編集人●鈴木勝行
住所●358-0046埼玉県入間市南峯400-4 FAX04-2936-4120
E-mail●info@ara-river-net.jp ホームページ●http://www.ara-river-net.jp/



長瀬町の石畳から荒川を望む。

写真提供・木崎芳雄氏(入間市写真連盟事務局長)

CONTENTS

- ① 新たな年、さらなる荒川流域の環境再生活動に向けて
「あなたの家も水源地!」から始まり
「源流から海までを一本の荒川に」まで
- ③ Network News
国が「多自然川づくり基本方針」を発表
市野川での河川整備計画の見直し
Network Information
埼玉県が河川愛護交流会、開催
- ④ 《魚の道第2回》みずかけ「サ」論
「魚の眼からみた一本の荒川」報告
- ⑤ あらかわ歴史探訪 Vol.3
名前発祥の地? 深谷市荒川(後編)
- ⑥ 森づくりの現場から Vol.3
群馬県の森林(後編)
- ⑦ ミズガキ紹介
「ミズガキ」の命名者君塚芳輝さん
川虫の話 Vol.3 「トビケラ」
- ⑧ 流域活動団体のイベント・カレンダー
2007年1~3月

流域環境に取り組む若者たちとエコブライド通信は休載。

新たな年、さらなる荒川流域の環境再生活動に向けて
「あなたの家も水源地!」から始まり
「源流から海までを一本の荒川に」まで

荒川流域ネットワーク代表理事 恵 小百合

荒川に清流を蘇らせようと始まった荒川流域ネットワークは、広大な2,940 km²の流域各地で活動している皆さんが支えて下さり、お蔭様で2007年に12年目を迎えます。これまでご支援して下さいました皆様に感謝申し上げます。

この節目にあたり、多様な個性を持つ団体・個人のネットワークである私たちが、地道に身近な地域でできることを一つずつ実現しつつ、ネットワークを組む意味のある運動を展開すると

いう原点に忠実に、課題を整理したいと思っています。

■ 3つの軸「Ⅰ軸：仲良しクラブ—使命達成集団」、「Ⅱ軸：地元の活動—流域・全国・地球規模の思考」、「Ⅲ軸：素人・ボランティア—専門家・契約業務」の組み合わせによる、流域の将来像を実現する運動展開内容とスケジュール(ビジョン達成時期や年度プログラムのタイミング調整)の確認、そしてGISを始めとする情報発信により、複数団



子どもが参加しての水質調査風景(2000年嵐山町)

体のネットワークの存在意義を高めたんですね。

■ 1995年から使命を増やしなが掲げて、10年間で5つとなりました。

■ 2005年からは、その使命一つずつについて『みずかけ「サ」論』という場で議論を始めました。2005年11月に「この10年間水質調査をしてきたけれど本当に水質はよくなったのか?」とい

うお題で、みずかけ“サ”論を開始しました。

1996年から「清流って何？家の前の川はきれいなのか？」と続けてきた水質調査で明らかになってきたのは、私たちの一人ひとりの家、「あなたの家が水源地！」だということでした。つまり、家庭排水をきれいにして流すことや雨水貯留により地下水涵養をすることで水源地になるのです。

2006年度は5月21日に第1回みずかけ“サ”論を開催し、流域経営から見た「木遣い文化」について、流域の森林の現状と西川材の事例などを検討しました。これは家庭から上流側を観る視点です。

■2006年7月26日に第2回みずかけ“サ”論を開き、荒川太郎右衛門地区自然再生協議会にどのようなテーマで参画できるのかを話し合い、「荒川流域ネットワークとして何を実施するか？」について「①水質モニタリング・GIS情報提供・人材育成②再生事業モニタリング③水と緑のネットワークの拠点として機能発揮の方法④市民への情報提供の役割⑤荒川清流大学の開催⑥荒川エコミュージアム『荒川太郎右衛門地区版(拠点)』づくり⑦流域経営策の提案」としてまとめ、協議会に提出しました。

■2005年5月21日には「多摩川の魚道研修(講師君塚芳輝氏)」を行い、魚たちだけではなく一本の川にするための魚道が流域のミズガキたちを惹きつけ、水辺の魅力と怖さを知る感性と好奇心を刺激している現場を見て、それでは荒川はどうか見直しました。

■荒川本流に注ぎ込む支流は、一体全部で何本あるのでしょうか？源流の一滴から川が始まることを考えますと、



一昨年の多摩川の魚道調査(日野農業用水堰)



第3回のみずかけ“サ”論の会場風景(日高市)

その答えは、『無数』、『流域面積分に降る雨粒の数だけ』とも言えますね。

荒川流域ネットワークのパンフレットにある荒川流域図に載せてある河川名の数だけでも、新河岸川水系も入れて100近くになります。

しかし、上流域や流域の各地で地表面が不透水・不浸透のものに置き換えられるのにもない、降雨のたびに荒川本流に流入する水量は増える一方です。これらの水を資源として溜め、利用することを考える、これも流域資源を活かす流域経営のひとつです。

荒川水系の本流・支流の河川流域に住む私たちの家も、水源地です。流域の各家庭で使い終わった排水は、浄化槽や下水処理場で浄化され、荒川に戻ります。その戻された下流で、再び飲料水などのために取水し、下流域の人々が利用しています。

さらに、各家庭や地域に降った雨量×面積分の雨水が地中深くに浸透して地下水として徐々に川に浸み出して行きます。ダムのある水源地域の森林だけが水源なのではなく、私たちの住んでいる家やまちも、しっかりと水を蓄えられるスポンジのような役割を持っていれば、雨水は徐々に川に流れ出し、下流にとっては水源地なのです！

皆さんの家の屋根や敷地分の面積、流域面積分で受け止めた雨水をできるだけ長時間貯留するか地下浸透させることで、荒川の本流の増水による洪水を防ぎ調節することにつながるのです。

土壌を通過していく水は、そこに含まれた人間活動から排出された有機汚濁物質を細菌が分解し、自然浄化されて湧き出し、河川の生き物たちにも清流と必要な時期に必要な水量を提供できるのです。

■2006年11月26日に流域経営の視点から「魚の眼で見た一本の荒川」というお題で第3回みずかけ“サ”論を開きました。(詳細は4ページの「魚の道」)このとき基調講演をお願いした3人の方々からのお話し(課題)は、「あなたの家も水源地！」運動を推進する根拠を浮き彫りにして下さいました。

■広大な荒川上流の流域全体や個性豊かな各支流環境とそこでの各団体の活動をみても多様なのですが、これから少なくとも魚にとって一本の荒川にしていくためには、秩父の源流から、新河岸川水系、荒川下流域、多摩川流域などと連携して進めるべき課題も山積しています。

パワーを結集すべきことを、できるところから始めましょう。そのためには、若い力や技術とセンス、熟年の知恵と粘り腰で鍛えられた行動力のベストミックスを求めて、多様な世代に伝えことのできる情報とプログラムをできるものから展開していきましょう。

■他の流域団体と共通に行っていることは、全国一斉水質調査ですが、これは、国交省が全国展開をするようになり3年目になります。GIS(地理情報システム)による情報発信と共有化は、立正大学後藤研究室の協力で基礎ができました。皆さんでお互いに応援しあって使いこなしていけば、荒川の位置づけが相対的に見えてくるでしょう。

そして何よりも楽しく、時にはおいしく季節を味わいながら、公益(不特定多数のための利益：不特定多数=自然界、まだ生まれていない次世代を含む)活動を通して荒川流域の環境再生をしましょう！

本年もどうぞよろしく願いいたします。



昨年8月の高麗川での投網研修と魚類調査風景

NetWork
News
1

「多自然型」から「多自然」へ。国が10月に「多自然川づくり基本方針」を発表

平成2年に『「多自然型川づくり」の推進について』の通達が出され、『多自然型川づくり』が始まり、現在では全ての川づくりにおいて実施されるようになった。

しかし、これらの中には、その趣旨を踏まえた評価される事例がある一方で、場所ごとの自然環境の特性への考慮を欠いた改修や他の工法をまねただけの画一的で安易な川づくりも多々見られるという。

そこで、国としては15年経過したところで「多自然型川づくり」レビュー委員会を設立し、現状を検証、今後の目指すべき方向性を検討した。同委員

会は平成18年6月に提言をまとめ、国土交通省はその提案を受け、10月に「多自然川づくり基本方針」を発表した。

多自然型川づくりは特別なモデル事業であるかのような誤解を招くため、「型」をとり、「多自然川づくり」と名称を変え、河川全体の営みを視野に入れ、地域の暮らしや歴史文化との調和にも配慮し、河川が本来有している生物の生息・生育・繁殖環境及び多様な河川景観を保全・創出するために、河川管理を行うことになった。

実施にあたっては、自然や自然に近いものを多く寄せ集めるのではなく、可能な限り自然の特性やメカニズムを

活用すること。また、その川の個性を保全・創出されるよう努め、事前・事後調査及び順応的管理を行うべきことが示されている。さらに留意点として①平面計画については過度の整正またはショートカットを避けること②縦断計画については、掘削等による河床材料や縦断形の変化や床止め等の横断工作物の採用は極力避けること③横断計画については、標準横断形による上下流一律の画一的形状での整備は避けること④護岸については必要最小限の区間とし、生物の生息・生育・繁殖環境と多様な河川景観の保全・創出に配慮すること⑤本川と支川との合流部は水面と河床の連続性を確保するよう努め、水生生物の自由な移動のため工夫すること等が示されている。

NetWork
News
2

市野川・羽尾地区における市民参加による河川整備計画の見直しの取り組み

開催状況●第1回：2006年8/22、
第2回：9/28、第3回：10/23、
第4回：12/19
場所●滑川町羽尾一区集会場

比企流域を流れる市野川は、森林公園駅前で大蛇行を繰り返す、原始河川の様相を呈している。河川管理者の埼玉県東松山県土整備事務所は、この流下能力の向上を図るため、直線化工事を行う予定だったが、市民団体が計画の見直しを要請。

現在、我が国第一線の専門家（国の多自然ワーキンググループメンバー）等の応援を得て、4団体、滑川町の参加により、計画の見直しを行っている。

これまで、4回の検討会が行われ、

現行計画の問題点と検討課題の確認、蛇行河川の流下能力評価（当初計画では0）、数値シミュレーションにより溢れるエリアの確認と治水上の必要条件設定、流下能力不足分を補う方策として蛇行河川の拡幅案（1WAY方式）とバイパス河川整備（2WAY方式）の比較検討、保全エリアの確認、河畔林樹木位置の測量などを行った。その結果、現況の河川環境を保全していくためには1WAYがよいか2WAYがよいか意見が分かれたが、上流側の1蛇行分については、2WAY方式を採用することとし、この結果を見て、上流側の計画を検討することとした。

詳細については、比企の川づくり協



市野川羽尾地区の河川状況



協議会の様子

議会が3月11日の埼玉県主催の河川愛護交流会で、報告する予定。

NetWork
Information
1

埼玉県の河川愛護交流会、今年はテーマ別の2つの分科会形式で開催

日時●2007年3月11日(日)
10:00～16:00

場所●さいたま市ときわ会館5階

毎年3月に行われている埼玉県が主催する河川愛護交流会は、企画運営検討会、分科会代表者との打合せを重ねた結果、「ポスターセッション」、「分科会」、「全体会」を3つの柱として、よ

り多くの団体の人が交流し、意見交換する場となることを目指して開催することになった。

午前中は、パネル展示している各団体の5分程度の発表が順番にあり、午後は、2つの分科会に分かれて発表と討議を行う。分科会テーマは「河川整備、川づくり」と「河川の美化・浄化・

利活用」の2つ。

分科会の後、全体会を行い「行政からの報告」と分科会報告および質疑応答を行うこととなった。

詳しくは、埼玉県中川・綾瀬川総合治水事務所 企画調査担当 木村 TEL 048-737-2001 FAX048-737-2193まで。

荒川流域ネットワークが展示参加した「東京源流展」(1月10～14日・科学技術館)の報告は次号に掲載する予定。

第3回みずかけ論『魚の眼からみた一本の荒川』の報告

魚が自由に上り下りできる川の再生は人々の立場を越えた知恵の流路

2006年11月26日に日高市生涯学習センターで開催された『魚の眼からみた一本の荒川』をテーマにした第3回目みずかけ“サ”論」での議論を掲載する。『魚の眼でみた1本の荒川』のお題に3人の講師から基調講演をいただき、3つの観点から荒川の歴史と現状の情報、治水、利水、環境を考える上で大変有意義な論点が提示された。その後、参加者全員と真剣で楽しい「みずかけ“サ”論」を展開した。

一人目の講師・金澤光さん(埼玉県環境科学国際センター)からは、『今までの試験研究成果からの提言』というテーマで、とくに荒川のアユの歴史・生態についてお話をして頂いた。今回の講演の詳細は、4号に掲載する予定だが、以下のようなお話だった。

「荒川に天然アユが遡上してきたのは昭和30年ごろまでで、水質汚濁により激減した。秋ヶ瀬堰は、魚道の対岸に越流部があり、構造的な面もあるが管理運用方法の問題もある。入間川については、菅間の堰で止まってしうから、そこから上流の支流に上ることはできない。現在アユは、長瀨から吹上の間で産卵し、孵化する。流下仔アユを取水堰で止めずに東京湾に流す仕組みが必要で、河川横断物(遡上阻害物)は取り除き、流下・遡上できる環境を造り出すことが重要である。遊泳力の弱い魚や魚道を使うことが下手な魚も移動しやすくすべきである。」

二人目の講師は原俊彦さん(荒川上流河川事務所副所長)で、『荒川の流水



明戸地区河道対策整備事業のイメージ鳥瞰図。魚道の設置については、再考の声もあがっていた。

管理について』をテーマに、荒川における農業用水や水道水の利用状況、ダムや取水施設等の位置とその働き、武蔵水路による利根川からの導水を含めた荒川水系の水収支、荒川本川や入間川の瀬切れ状況など荒川水系の流水管理の概要について説明があった。

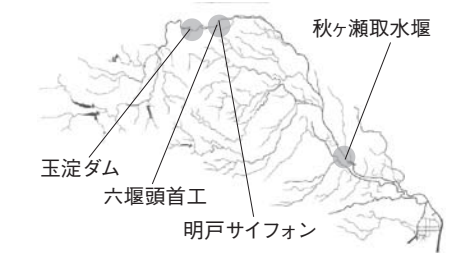
魚等への配慮については、秋ヶ瀬堰や六堰頭首工の事例が紹介された。秋ヶ瀬堰では、水資源機構が既設魚道の改良に取り組み、平成18年度の遡上数は、45万尾を超えた。六堰頭首工では、アイスハーバー型魚道と緩勾配魚道が整備され、平成16年~17年の魚道調査結果が紹介された。また、明戸サイフ



オンについては、床止めと魚道の設置など撤去工事の概要についても紹介された。そして最後に「魚にとって望ましい河川環境」とは、①魚類の移動や生息に必要な水量、②魚類の移動に必要な流水の連続性、③魚類の生息や産卵の場、④洪水時の魚類の避難場所があること、と結ばれた。

三人目の講演は内藤定芳さん(NPO法人秩父の環境を考える会・荒川再生プロジェクトチーム)で、『玉淀ダムの存在意義を考える』というテーマで問題提起をされた。

昭和39年に設置された玉淀ダムは発電と農業用水の供給という2つの機能を持つが、埼玉県が発電事業から撤退することから、生態系を分断している



荒川の上流と中流を分断している玉淀ダム。恒常的にゲートを上げるための提案と議論が行われた。

玉淀ダムの撤去あるいは、貯水停止についての提案があった。現状を継続する場合の費用負担についての試算、今後の農業用の櫛引用水の新たな上流側での取水口の試案と具体的な暗渠化案などが提示された。民間に売却する前にゲートを上げることによって魚の遡上を可能にしたいという提案であった。

『みずかけ“サ”論』では、堰について、管理者や水利権者の考え方、総合的な観点と個別の権利とのかかわりの調整が必要なことが挙げられた。

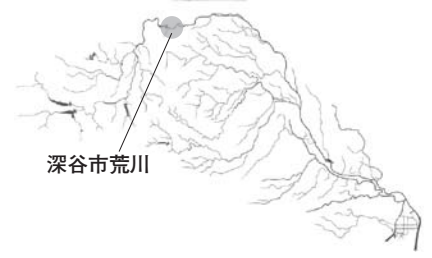
また魚道についてのタイプの議論があり、魚道に砂がたまる現在のタイプは望ましいものではないという意見や、「何で魚道なの？自然に戻すべきだ。人間が勝手に壊したのだから元に戻すべきだ」という意見もあった。

東京湾で浅瀬をきれいにしようという様々な取り組みがなされているので、そこで育った仔アユが、自由に秩父まで行けるようになるという話しもあった。

玉淀ダムを撤去するとか、その他の構造物が今後役目を終えていく際の撤去費用は誰が負担すべきか？という問題提議もあった。

荒川上流、中流の河川の砂礫を東京オリンピックのときに持ち去った後、堰やダムにより土砂が供給されていない状況への対処策が必要だという意見や、教育委員会に子どもたちへこの川の現状を伝えるため教員にわかりやすい情報を出すべきだという意見など活発な議論がなされた。

『荒川』の名前発祥の地!?
深谷市(旧花園町)荒川を訪ねる (後編)



鎌倉街道の渡河点だった荒川郷、戦国時代「荒川衆」という在郷武士団がいた。

前号に続き、「荒川郷」訪問記の続編。鎌倉時代の遺物と戦国時代の文献に残る荒川村の姿。

板石塔婆は長瀨周辺の結晶片岩を利用しているので青石とも呼ばれている。

渡河点の下流には、川越岩(かわこしいわ)と呼ばれる大きな岩がある。昔は荒川を渡る際の目標や増水時の安全の目安とされた岩だそうだ。現在は川沿いが採石会社の私有地となっているため、左岸側からは近づくことができない。

鎌倉街道に縁のある遺物としてもう一つ「お茶々の井戸」がある。さいたま川の博物館の対岸の斜面にあり、昔ここに茶店があり「茶々」という娘がいて繁盛していたという話が残っている。この井戸は、どんなに日照りが続いても涸れることはないと伝えられているが、深さが1尺ほどしかなく、中は草が覆っていた。茶店が繁盛していたという言い伝えから、鎌倉時代この道をよくの人が往来していたようだ。

この時期にできた『宴曲抄』に、打ち渡す早瀬に駒やなずむらん。たぎりおつる浪の荒河行過て、下にながる見馴川

という表現で「荒河」の名がでてくる。渡河点は寄居と熊谷の間のようにあるが、正確な場所は分からない。早瀬で流れが速い様子が表現されている。



花園橋から上流部を望む。右手に荒川郷が見える

荒川の地名が最初に文献に出てくるのは、戦国時代の天正4年(1576)の『持田家文書』である。その中で「荒河之郷」という名で荒川が登場してくる。当時、小田原北条氏の支城・鉢形城の城領であり、家臣団の一つ「荒川衆」という名で在郷の武士団を形成していたことが書き残されている。『持田家文書』は戦国期の武士団の形成と近郷の農民との関わりを知るための貴重な資料として様々に研究されている。

持田家には文禄4年(1595)の検知帳なども残され、江戸時代初期の村の様子を伝える貴重な資料にもなっている。戦国期から近世の間、荒川で、名主・土豪として圧倒的な力を持っていた持田家が、いつ荒川郷に来たかは謎であるという。地元には、以前荒川の近く川端地区にあった寿楽院という寺院の敷地と持田家の敷地を交換したという伝承が残っていて、持田家が地域に大きな力を持っていたことを示している。

川端地区は石切場があり、秩父からの木材の流下の中継地点でもあり、製粉のため舟の水車を係留しておく場所として、荒川と深い関わりを持つ地域であったことが分かっている。

現在、真言宗荒澤山寿楽院は国道140号線の側にあるが、その隣の敷地

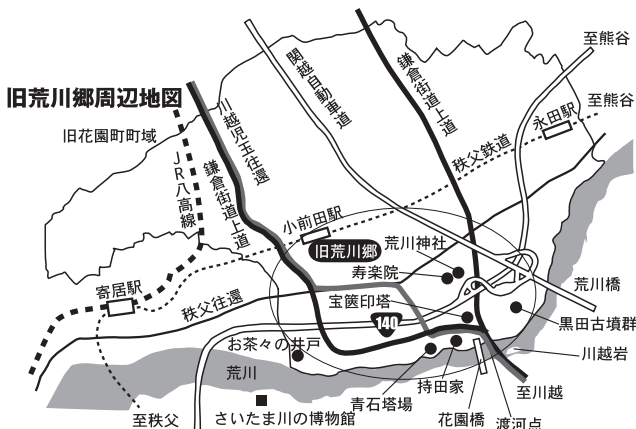
に村社荒川神社がある。荒川神社は明治40年に荒川村にあった7つの神社を合祀して建てられた新しい神社である。

境内には2つだけ祠があったが、名前が消えていて境内神社の名前は分からなかった。屋根に落ち葉が積ったままになり、どことなく寂れた趣きであった。現在も持田家の子孫の人が祭司をされているそうだ。

荒川地区から見た現在の荒川は、流れも穏やかで、水量も多くなく段丘の間をゆっくりと流れている。旧花園町の記録を見ると江戸時代から明治時代にかけて増水時に土地が流出したという記録が3回、荒川地区の下流永田地区での浸水が1742年に1回記録されているが、地元の人々は近年は、この地域が洪水で被害がでるようなことはなかったという。川から高い段丘に村が位置しているためだと思われる。

今回の訪問で、深谷市荒川が荒川の名前の由来とどのような関わりがあるのかは分からなかったが、古墳時代から製鉄が行われ、鎌倉街道の渡河点として重要な地域であったことを知ることができた。また、この地が荒川の扇状地の付け根に位置しているらしいことも分かった。

荒川は、旧川本町から熊谷市にかけて8回も河道を変えているという研究もあるが、この河道の変遷と熊谷市北側の歴史については、現地を訪れた後、記してみたい。(文・鈴木勝行)



静かに佇む荒川神社。明治40年に建てられた。

人が中山間地で暮らすには、森林資源のみに頼らない、多様な仕事やもの作りが必要。

2号では、群馬県の森林や里山の保全におけるボランティアと森林組合・行政との協働についてお聞きしたが、森林を活かす具体的取り組みと中山間地を守るこれからのビジョンについてお話を聞いた。

——群馬県における森林保全の取り組みの特徴は

市民の側も「群馬ビジョンを推進する県民の会」という会を作り、森林の保全について、自分たちのできることや提携してできる作業を行っている。スギ・ヒノキの間伐の対象地の榛東村では、かなり木が大きくなっていて、森林組合と一緒に作業をしている。この場合は森林組合もボランティアで、機材なども提供している。

間伐材の利用については、木を使った土留めとかガードレールなどの開発を行ったが、量的には僅かである。

学校の椅子や机は、現在スチール製が主流だが、その1セット3800円という値段に対抗するために、何とか10,000円以下で作れないかと木材加工会社を対象に何回もコンペを行った。その結果、15,000円位まで下げることができたが、それ以上は難しいのが実情だ。そんなことをしながら学校での使用を増やそうとしている。

建築は現在、ハウスメーカーが大きなシェアを持っているので、大量に均一の木材を要求される。森林組合ではなかなか対応しきれず、どうしても輸入材に頼らざるを得ないシステムがで



群馬県の県産材センターの全景

搬出のための林道を付けたりすると、コスト倒れになる。

チップについては、工場まで持っていかなければならず、安い外材が入ってきている現状では採算があわない。——これからの中山間地のあり方についてのビジョンは

山村の収入を林業だけにたよることには無理がある。山菜やキノコ採り、炭焼きなど多様な仕事やもの作りが必要である。木酢液の利用など昔なかった商品化の仕組みなども必要になった。バイオマス・エネルギーの開発や利用については、ハイテクの技術に任せるとよりも昔から地域にあったローテクな技術の集積を進めていく方が、大切であると考えている。

県では、10年位前から始め、この間終わったが、「道普請型公共事業」という事業を実施した。昔行っていたような地域の道を直す作業を公共事業として位置づけて、補助を行っていた。それで既存の組織がかなり動き、新たな公共事業を作りだしていった。

例えば、林業研究グループが「カタクリの道の整備事業」といったような事業を提案・実施したりした。学校による河川のゴミ拾いなども公共事業として認められた。

1回につき10万円ほどの補助金が出て、県内の既存の団体がボランティア活動を行うという土壌がかなり形成されてきた。県としての事業は終わって、現在は市町村に引き継がれている。

昔から農山村にたくさんある共同作業を公共事業と位置づけて再評価したわけだ。全てうまくいったわけではないが、新しい仕組みづくりを本腰を入れて、10年間試行錯誤しながらやってきた。そういう仕組み作りがこれから群馬県の森林や河川を守っていく上で、非常に大切だと思う。



森づくりの現場から

Vol.3

群馬県の森林《後編》

インタビュー▶内山節氏

立教大学異文化コミュニケーション研究科教授
NPO法人森づくりフォーラム代表理事

群馬県で森林作業に従事している人は若い。例えば、田野藤岡森林組合の場合は作業員の平均年齢は32歳位。新規就労者の大半は都市部の人たちだ。県の機関で労働力支援センターが窓口になって公募しているが、募集の倍率も50倍ぐらい有り、20年位前から労働力不足はなくなった。地域の人より外から来ている人が多く、その人たちが、仕事とボランティアの両方の作業に対するセンスを兼ね備えている。

——群馬県では間伐材の利用や建築材の対応はどのように行われているか



間伐材を利用したガードレール例

きてしまっている。

そこで群馬県では、県産材センターを作り、大量の建築材の注文があっても、ストックを作っておいて、県内の材木の量を把握して、即対応できる態勢をつくった。

柱材については、集成材に変わってきて、無垢の木の柱の使用は減っている。合板の方が狂いは少なくなるが、接着剤によるシックハウス症候群などのアレルギー問題が起きている。

無垢の木は生きているので、何年かたつと狂いを調整しなければならない。合板材はその必要はないが、50年ほど持つといわれているが、条件によっては持つ期間は大分違う。その点、買い手も知っておかなければいけない。

昔のように木材を川を利用して移動させるのは、ダムや堰がある状態では難しい。ケーブルを使って下ろしたり、

ミズガキ紹介 第3回

「ミズガキ」の命名者
君塚芳輝さん(淡水魚研究家)

「ハーフコーン」を日本標準にしたい!



『ミズガキ(aqua kids)の命名者』でご本人も現役ミズガキの君塚芳輝さん。本誌第2号に登場した投網3人娘の師匠。淡水魚の専門家。水辺のない日暮里生まれの江戸っ子。府中から調布へ引越し多摩川で育つ。全国の河川に「ハーフコーン型」の魚道づくり指導を展開中。(江戸川大学、田園調布大学、実践女子大学非常勤講師)

——「ミズガキ」を命名された経緯を教えてください。

日本鳥類保護連盟の若手研究者の飲み会で「川や水辺で遊ぶ地元の子どもは水棲生物で、環境指標種だね。」と話しているとき、「ミズガキ」と命名したのです。

——ご自身の投網の師匠は?

名人横田光夫さんです。14~15年前から手ほどきを受けました。投網は、日暮里・鶯谷近くのさがみや魚網店で捕る魚種ごとに多種あります。君塚式のかまぼこ型の手網もあるんですよ!多摩川流域では水辺の楽校がたくさんでき、投網や君塚式の手網でとった魚を水辺で移動水族館(幅の狭いガラスの箱型水槽)として子どもたちに見せています。小学校に投網クラブや水槽



横浜市鵜川の粗石付双斜曲面式(全断面魚道)



多摩川・日野用水堰にあるハーフコーン型魚道で楽しそうに遊ぶ子どもたち。

クラブができて師匠をしています。

——ハーフコーン型の魚道については?

多摩川でも魚が上れないところが増えて、何とか魚が戻れるようにしたかった。最初は、多摩川に幅20センチのハーフコーン型の魚道を丸太で作りました。

——90年に「近頃の魚の悩み」「近頃の魚の望み」という論文発表、魚にとって使いにくい魚道の多いことを指摘されたそうですね。

「粗石付双斜曲面式(全断面魚道)が横浜市鵜(いたち)川にあるんです。これは水の落差の上流側におわん状につくります。

「ハーフコーン型」魚道は、私の論文を読んで法政大学工学部教授西谷隆亘先生が水理計算をして下さり、魚も疲れずに上れ、水位が多くても少なくとも魚の上下流移動は妨げられないことが検証されました。先生は、丸太の魚道を夢見たが、国土交通省は、コンクリート製のハーフコーン魚道を採用し、全国に広がっています。現在全国でハーフコーン型の魚道は、80例あります。

——これからの川づくりへの展望は?

とくに、遡上力の弱い水棲生物であるシマドジョウ、モズクガニ、ヌカエビなどが使える魚道が必要です。上・中流では礫や砂が溜まりませんし、下流ではごみが溜まらない。子供が流されても休む場所ができるので安全です。

日本の河川には、20~40万箇所の落差がありますが、日本の川の水位変動にあったハーフコーン魚道をユニバーサルデザインとして、全国の河川に設置したい。そして小学生に人間の本能としての漁り(すなごり)の楽しさを味わってもらいたい。その楽しさを維持したいという気持ちが多自然川づくりや魚道の遊び場維持につながります。——どうもありがとうございました。

清流の巣作りの達人

トビケラ

トビケラは現在までに世界で10,000種程度、日本では400種程が確認されているが、新種や未記録の種も多い。完全変態と呼ばれる卵→幼虫→蛹→成虫の4つの段階を送る。

幼虫は、主に水の汚れがひどくない河川や湖沼を生息する。大きな石の隙間に、口から糸をはいて小石や砂で巣を作り、けい藻や落ち葉の破片を食べて暮らす。巣を作らない種類もいる。

幼虫の体型の特徴は、「①3対のはっきりとしたアシ②体形は円筒形のイモムシ状③尾はなく、尾肢にはかぎ爪がある」などである。カゲロウ目の幼虫のように大きな体型の変化は見られないのは、絹糸で張った網や、砂粒や植物片をつづり合わせて作った筒巢を持つことによって、流れてくる餌を利用できたり捕食者から逃れたりできるからと考えられる。

成熟した幼虫は、水中の石の裏などに小石で作った巣の中に、まゆを作って蛹になる。3週間ほどでそのまゆを破り、多くは水中を泳ぎ上がって水面や水面上に突き出た石の上などで羽化する。

成虫は蛾に似ているが、翅には隣粉ではなく短い毛が密生している。

雄は夕暮れ時に川岸などで群飛し、雌が群れに入るとペアができ、川岸の草の上などで交尾が行われる。

産卵方法は水中の石の裏に産卵するもの、卵塊で生むもの、落下産卵するものなど種によって様々。

成虫は食物を食べることはほとんど無く、7~10日で生涯を終える。



ヒゲナガカワトビケラ(都幾川・鞍掛橋下流)

▶ 流域活動団体 ◀ EVENT INFORMATION

● ちょっと出かけてみませんか



イベントについてのお問い合わせは
荒川流域ネットワーク事務所
● FAX 04-2936-4120
● E-mail: info@ara-river-net.jp
*連絡はできるだけFAXかmailをお願いします。

📅 イベント 🌿 自然観察会 🗑️ 保全活動 🧹 清掃活動 🗣️ シンポジウム 📖 学習会

📅 新春プロジェクト発表会 秩父市

内容 ● ①研究発表/小学生3名「地球温暖化にストップ」他
②講演「地球が熱くなる これからどうする」気象報士
平沼洋司氏③分科会/秩父のシカ、サル、クマ等
による害獣の現状と今後の対策—シンポジウム

日時 ● 2007年1月21日(日) 13:00~16:50

会場 ● 秩父市歴史文化伝承館/参加費 ● 無料

主催 ● NPO法人秩父の環境を考える会

問合せ ● 0494-54-1490 (黒澤)

🌿 アニマルトラッキング 秩父市

内容 ● 浦山ダムに集合後、バスで旧浦山小学校に移動し、
周辺を歩きながらクマ、シカ、サルなど動物たちの
生息を観察します。

日時 ● 2007年1月28日(日) 9:00~12:00

集合場所 ● 浦山ダムサイト「うららピア」前

参加費 ● 無料

主催 ● NPO法人秩父の環境を考える会

問合せ ● 0494-54-1490 (黒澤)

📅 第6回環境まちづくりフォーラム埼玉 熊谷市

内容 ● ①カップグループ(河川環境)=県立大麻生公園②メ
ダカグループ(水田水辺)=ムサシトミヨ保護センタ
ー③キツネグループ(里山環境)=観音山・有機物循
環センター④ミミズグループ(ゴミ問題)=観音山・
有機物循環センター⑤ナマズグループ(省エネ)=別
府焼却場⑥タケノコグループ(環境教育)=市立別府
沼公園の6分科会に分かれ、午前中は熊谷市内で
フィールド学習を実施。午後は、ポスターセッシ
ョンに続き6分科会と全体集会を開催します。

日時 ● 2006年2月25日(日) 9:00~16:30

会場 ● 立正大学熊谷キャンパス

主催 ● 熊谷の環境を考える連絡協議会運営委員&環境まち
づくりフォーラム埼玉 第6回実行委員会

問合せ ● 048-522-4837 (岡里)

🌿 太田ヶ谷の野鳥観察会 鶴ヶ島市

内容 ● 太田ヶ谷の雑木林や沼の周辺を歩きながら野鳥観
察をします。今年はどんな野鳥に会えるでしょうか。

持ち物 ● あれば双眼鏡、筆記用具

日時 ● 2007年2月12日(月) 9:00~12:00 (雨天中止)

集合場所 ● 鶴ヶ島市市民の森1号地 (鶴ヶ島駅8:30)

主催 ● 鶴ヶ島の自然を守る会&
(財)埼玉県生態系保護協会 川越・坂戸・鶴ヶ島支部

問合せ ● 049-286-2882 (大和田)

📅 第5回かわごえ環境フォーラム 川越市

内容 ● 午前の部: 市民・民間団体・事業者・行政による環
境活動報告会(ポスターセッション)
午後の部: 循環型社会形成シンポジウム「水のまち川
越の復活をめざして」
・小金井市における雨水地下浸透と湧水の復活
(倉宗司氏:みずとみどり研究会)
・昔の川越の水辺(齊藤恒氏:川越の歴史を語る会)

日時 ● 2007年2月24日(土) 9:30~16:30

会場 ● 川越市市民会館会議室(川越市郭町1-18-7)

主催 ● かわごえ環境ネット/参加費 ● 無料

問合せ ● かわごえ環境ネット事務局(川越市環境政策課)
Tel. 049-224-8811(内線2612)

📖 環境問題学習会 上尾市

内容 ● 上尾市やその周辺で育つ希少植物の現況につい
て澤上勝好さんから報告してもらい、それらの保護
の方法を話し合います。

日時 ● 2007年2月15日(木) 18:30~20:30

会場 ● 上尾公民館(401 講座室)

参加費 ● 無料

主催 ● 上尾市環境推進協議会

問合せ ● 048-726-1409 (小倉)

🌿 「こどもとおとなの自然塾」~冬の渡り鳥を見てみよう~ 志木市

内容 ● 柳瀬川で冬に志木へ来る渡り鳥を観察します。

持物 ● 筆記用具、寒さ対策、双眼鏡 等

日時 ● 2007年2月3日(土) 9:00~11:00 (雨天中止)

会場 ● 東上線「柳瀬川駅」前 サミット前広場

参加費 ● 各回とも200円(会員100円、中学生以下は無料)
※ 家族参加は家族全員で1名扱い

主催 ● NPO法人エコシティ志木&(財)埼玉県生態系保護協会 志木支部

問合せ ● 048-471-2211 (志木市立教育サービスセンター)

🌿 鳥の観察会とアシ刈り作業 上尾市

内容 ● ウソなどの三つ又沼を訪れる冬の野鳥を観察し、ピ
オトープの保全作業も同時に行います。

日時 ● 2007年2月18日(日) 9:30~11:30

集合場所 ● 三つ又沼駐車場

参加費 ● 100円

主催 ● 上尾市環境保全団体連絡会

問合せ ● 048-726-1078 (菅間)

編集後記

みずかけサ論での金澤さんのお話をお聞きして、改めて入間川に農業
用の堰が無かった時代には、大量のアユが上っていたことが分かった。
本流とともに入間川水系にもアユが遡上する時代が来ることを願って、
活動を展開していきたい。国も新に決めた「多自然川づくり」の中で、
河川全体の自然の営みを視野に入れること、地域の暮らしや歴史・文化
と結びついた川づくりを基本指針としている。毎日新聞には淀川、利根
川などの流域協議会で市民団体が参加出来ない事態が起こっているとい
う記事があったが、荒川流域では、以前の遡上環境を再生し、荒川を一本
の川にするために水利に関わる関係機関、漁連、地域住民が連携するた
めの体制が進むように活動していきたい。(鈴木)